3. 鹿児島県内の中学校における武道授業の実施状況調査

１．調査の概要

２．結果

３．まとめ

3. 鹿児島県内の中学校における武道授業の実施状況調査

＜事業概要＞
県内の中学校での武道授業の実施状況について，アンケート調査により現状を把握するとともに，教員の視点から教育効果と課題を明らかにする．

1. 調査の概要

(1)調査対象及び調査方法

鹿児島県内の全ての公立中学（義務教育学校を含む）を対象に，郵送法と Web 調査を併用したアンケート調査を行った．調査期間は，令和 3 年 8 月から令和 4 年 1 月で，回収数（率）は 115（54.2%）であった．

(2)調査内容

調査内容は，①学校の概要（生徒数，教員数），②武道授業の実施状況（実施種目，単元時間数，実施形態，外部指導者，指導内容，習得状況），③「我が国固有の伝統と文化への理解を深める」ことへの留意点（自由記述），④武道の授業を実施するにあたっての課題・要望（自由記述），⑤回答者の属性（性別，年齢，職名，担当授業科目，武道授業担当の有無，段位の保有，武道経験）である．

2. 結果

(1)学校の概要

回答のあった学校の概要を表1に示している．平均全校生徒数は 231 人で，最も少ない学校が 3 人，最も多い学校が 911 人であり標準偏差からもばらつきが大きい様子が窺える．平均教員数は 21 人，標準偏差 14.5 で，生徒数と同様にとばらつきが大きい．保健体育教員数は平均 2 人（標準偏差 1.3）であった．

表 1　学校の概要

	最小値	最大値	平均
全生徒数（n=113）	3	911	231.0±236.8
教員数(n=109)	4	65	20.9±14.5
保健体育教員数(n=113)	0	6	2.0±1.3

(2)回答者の属性

回答者の性別は，男性が 88.7%，女性が 11.3%で 9 割近くを男性が占めている．年齢では，50 歳以上が 40.0%，次いで 40 歳代（24.3%），30 歳代（20.9%）の順で，平均年齢は 40 歳±10.2 歳であった．主な担当科目は保健体育が 93.0%を占めている．また，95.7%が武道の授業を担当している一方で，担当していない者も 3.5%みられた．

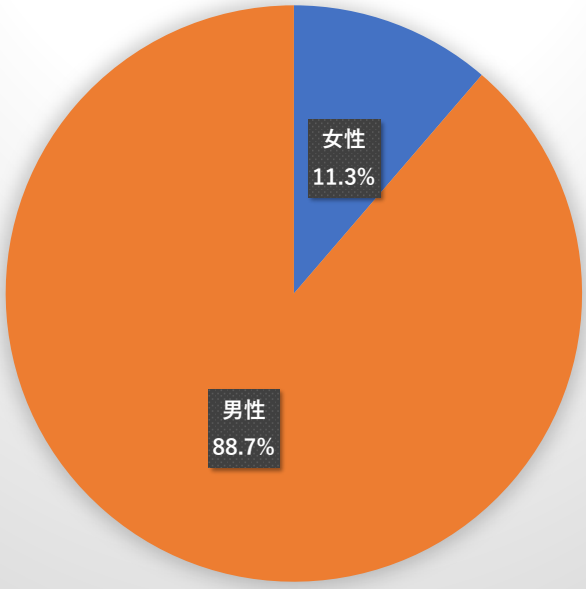

図 1 回答者の性別（n=115）

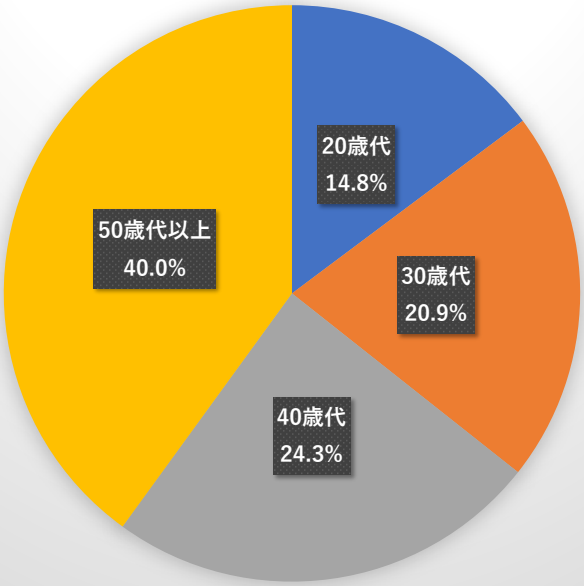

図2 回答者の年齢（n=115）

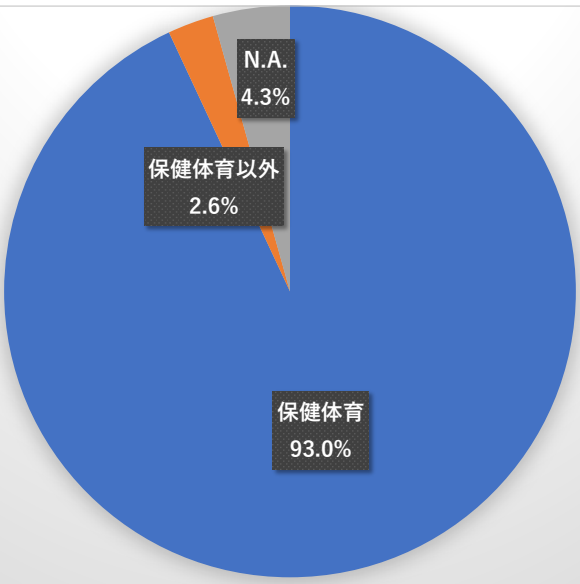

図3 回答者の主な担当科目（n=115）

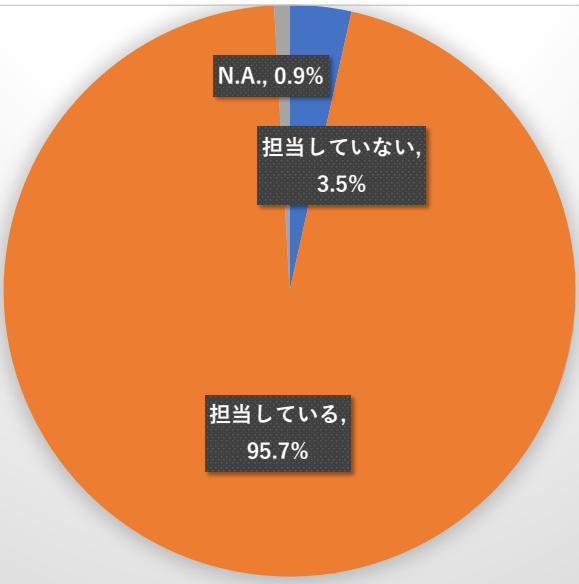

図4 回答者の武道授業担当状況（n=115）

武道種目の段位を保有しているかを尋ねたところ，段位を持っていると回答した者は 56.5%で，持っていないと回答した者は 43.5%であった．種目別では柔道の段位を保有している者が最も多く（48.7%）半数近くが初段以上であり，次いで「剣道」（16.5%）「相撲」（0.9%）の順であった．さらに，自身の学校での体育の授業以外での武道種目の経験の有無については，「経験あり」と回答した者が 62.8%，『経験なし』と回答した者が 37.4%であった．

回答者の 90%以上が武道の授業を担当している中で，段位を保有していない者が 4 割を超えており，体育の授業以外に武道種目の経験がない者の割合も 4 割近くに達している．

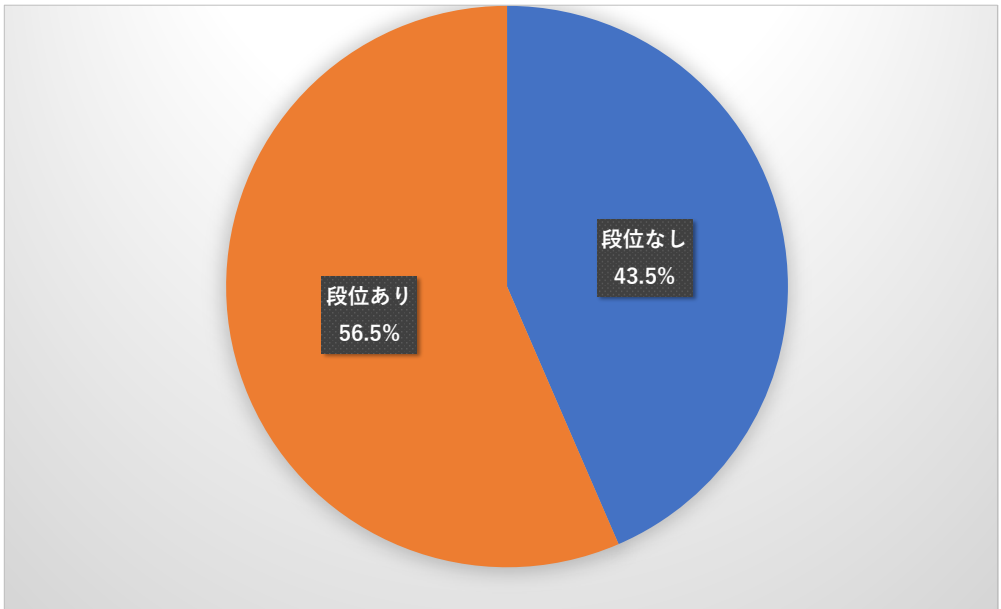

図5 回答者の段位保有状況

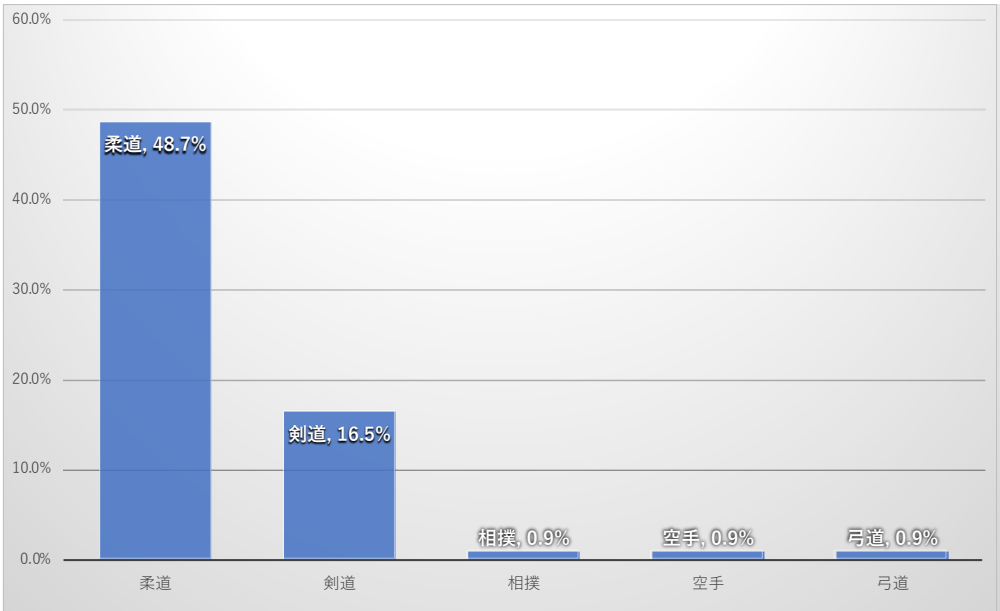

図6 段位を保有している種目

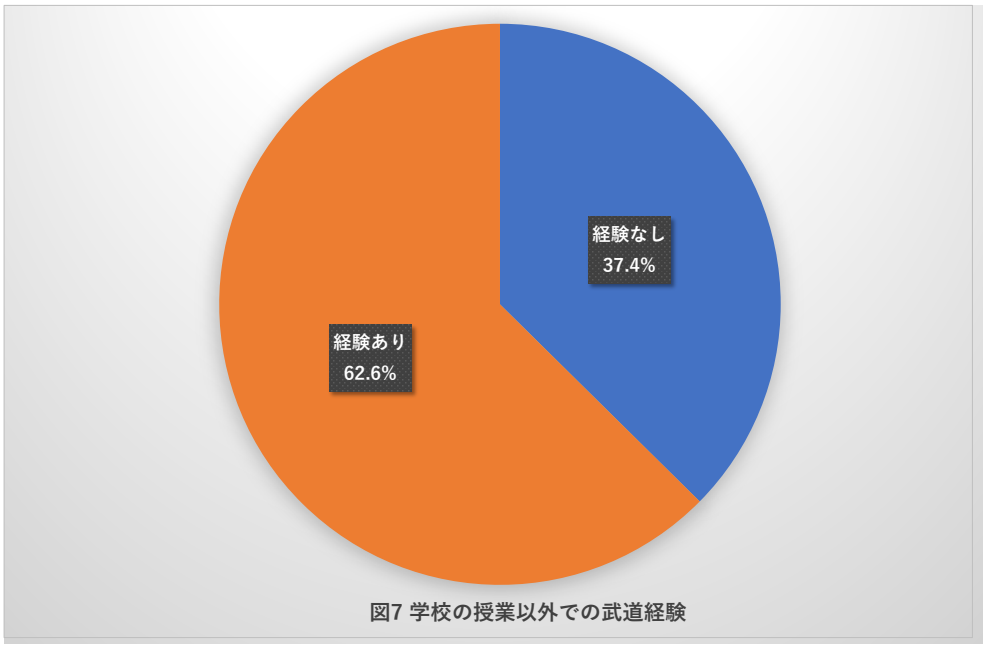

図7 学校の授業以外での武道経験

(3)武道授業の実施状況

1）実施種目と実施形態

各学校で実施している武道種目を図8に示している．最も多く行われているのは「柔道」（74.8%）で，次いで「剣道」（28.7%），「空手」（3.5%），「相撲」（2.6%），「なぎなた」（1.7%）の順であった．

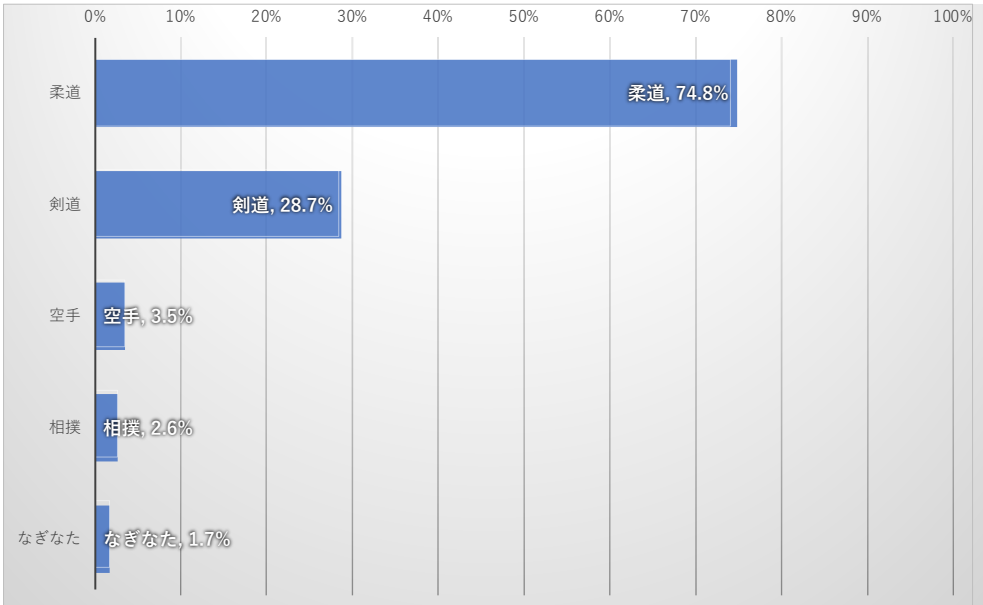

図8 実施している武道種目（n=115，複数回答）

学年毎での平均実施時間数は，1 年生が 8.80±2.94 時間，2 年生 8.96±2.34 時間，3 年生 7.50±4.10 時間であった．

表 2　実施時間数

	時間数	S.D.	最小値	最大値
1 年生	8.80	2.94	0	18
2 年生	8.96	2.34	0	15
3 年生	7.50	4.10	0	18

授業の実施形態としては，「男女共習」で行っている学校が 72.2%，「男女別習」で行っている学校が 18.3%で，男女共習・男女別習の併用」で行っている学校も 9.6%あった．

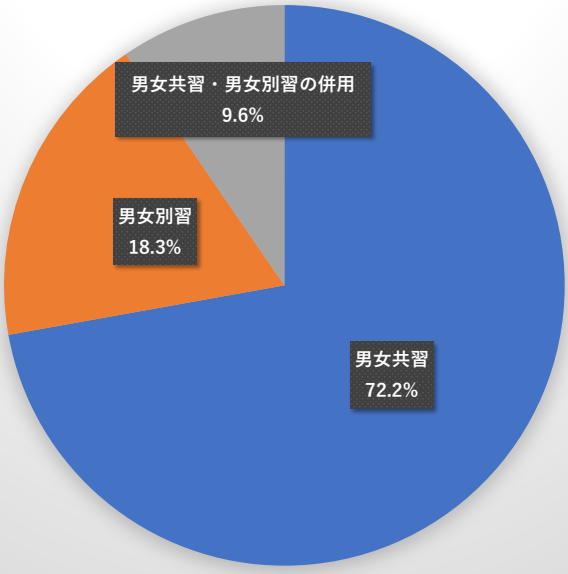

図9 授業の実施形態（n=115）

男女共習で行っている学校で担当している教員の性別を尋ねたところ,「男性教員」が 85.5%,「女性教員」が 13.3%, 男性教員と女性教員とのチームティーチングで行っている学校が 9.6%であった.

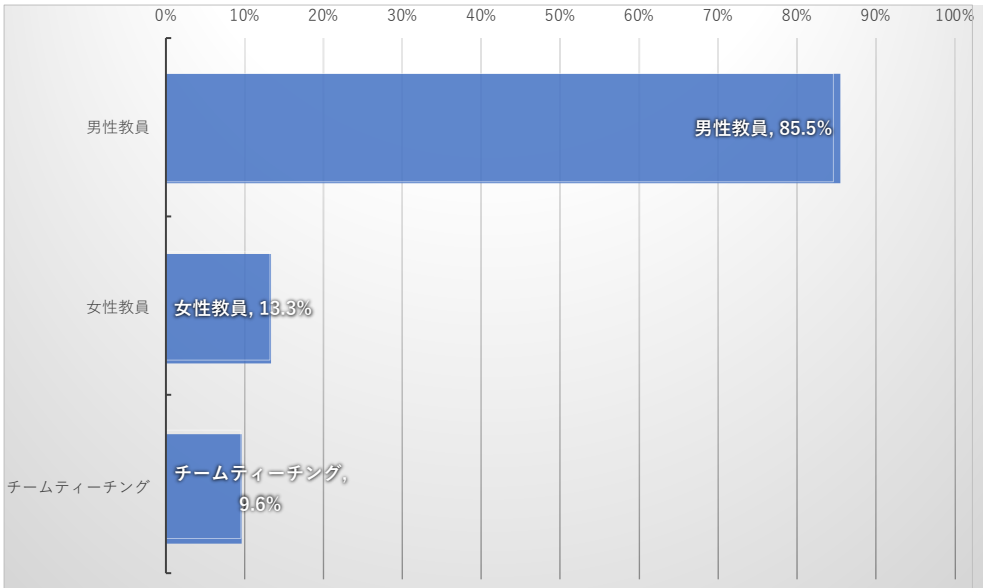

図10 男女共習時の担当教員の性別（n=83, 複数回答）

男女別習で行っている学校（n=31）には, 担当教員と対象生徒の性別の組み合わせを尋ねた. 男子生徒に対して男性教員が担当する学校は 96.8%に上る一方で, 女子生徒に対して女性教員が担当する学校は 38.7%であった. チームティーチングを採用する学校も 3.2%みられた.

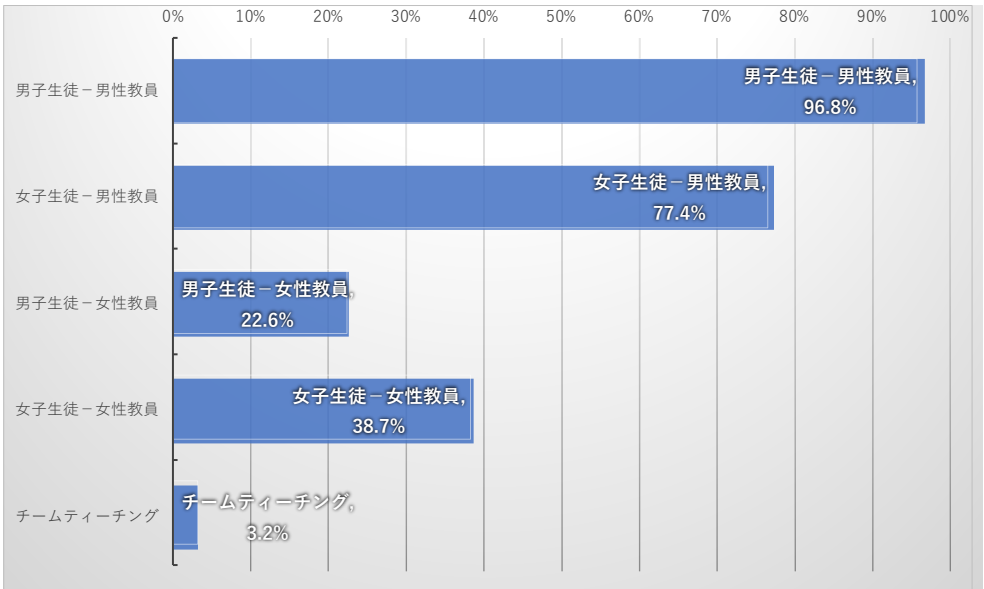

図11 男女別習時の生徒と教員の性別（n=31, 複数回答）

2）外部指導者の任用状況

外部指導者を任用している学校は 13.9%で，86.1%の学校では任用していない．

任用している学校（16 校）で外部指導者が担当する学年について尋ねたところ，全ての学校で 1 年生を担当しており，2 年生（75.0%），3 年生（68.8%）と学年が上がるにつれて，低くなる様子が窺える．

また，外部指導者の役割については，「授業の実施」（64.4%）が最も多く，次いで「授業の補助」（57.1%），「授業計画の立案」（14.3%）の順であった．

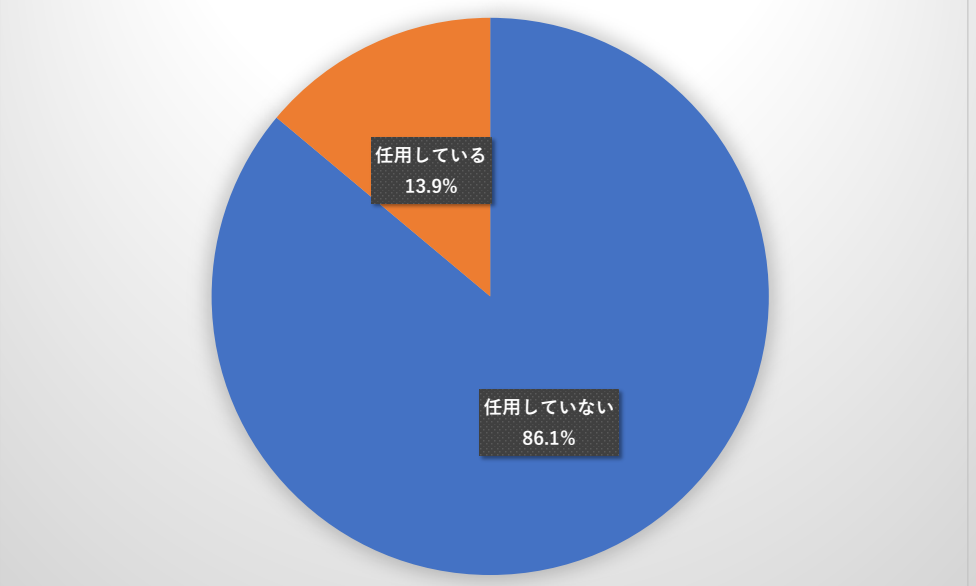

図12 外部指導者の任用（n=115）

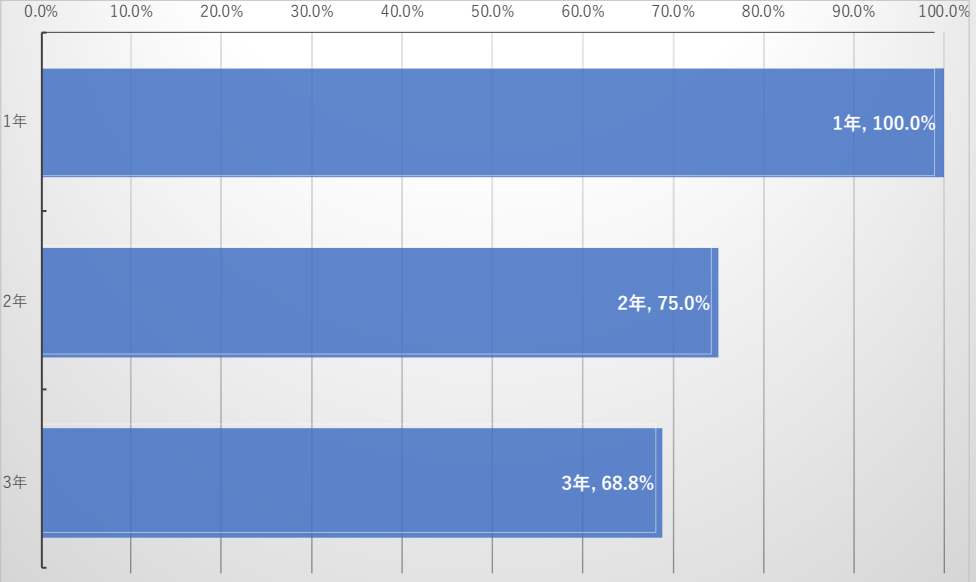

図13 外部指導者の担当学年（n=16，複数回答）

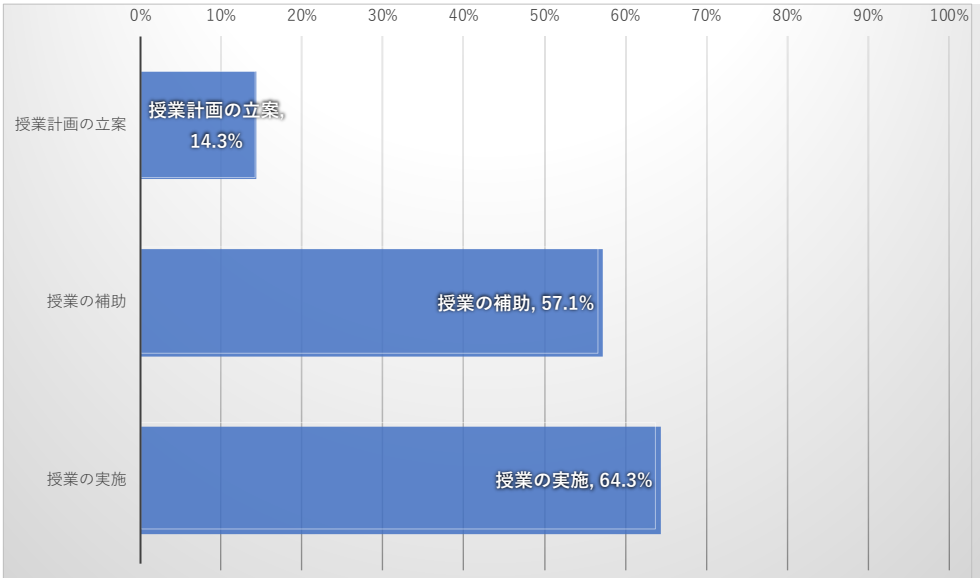

図14 外部指導者の役割（n=14, 複数回答）

3）授業で扱う内容と生徒の習得状況

武道の授業でどのような内容を扱っているのかを尋ねた（図15）.「扱っている」との回答が最も多かったのは「健康・安全に配慮すること」（90.4%）で，次いで「健康・安全を確保すること」（86.8%），「技の名称や行い方」（84.2%），「基本となる技」（81.4%），「相手を尊重し，伝統的な行動の仕方」（76.1%）の順であった.

一方，「扱っていない」と「あまり扱っていない」との回答が最も多かったのは，「試合の行い方」（扱っていない，8.0%，あまり扱っていない，26.5%）で，以下「合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫すること」（扱っていない，5.3%，あまり扱っていない，28.3%），「攻防など自己の課題を発見すること」（扱っていない，4.4%，あまり扱っていない，27.4%），「攻防など自己や仲間の課題を発見すること」（扱っていない，4.4%，あまり扱っていない，25.7%）の順であった.

これらの授業内容について，生徒がどの程度習得できているかを尋ねた結果を図16に示している.「習得できている」との回答が最も多かったのは「健康・安全に配慮すること」（45.1%）で，「健康・安全を確保すること」（42.5%）が続いている. 以下，「相手を尊重し，伝統的な行動の仕方」（23.2%），「禁じ技の説明」（23.2%），「武道に積極的に取り組むこと」（21.4%），「基本となる技」（20.4%）の順であった.

一方，「習得できていない」「あまり習得できていない」との回答が最も多かったのは，「合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫すること」（習得できていない，6.2%，あまり習得できていない，55.8%）で，次いで「攻防など自己の課題を発見すること」（習得できていない，4.4%，あまり習得できていない，54.0%），「武道に関連して高まる体力」（習得できていない，9.7%，あまり習得できていない，44.2%），「試合の行い方」（習得できていない，10.6%，あまり習得できていない，41.6%）の順であった.

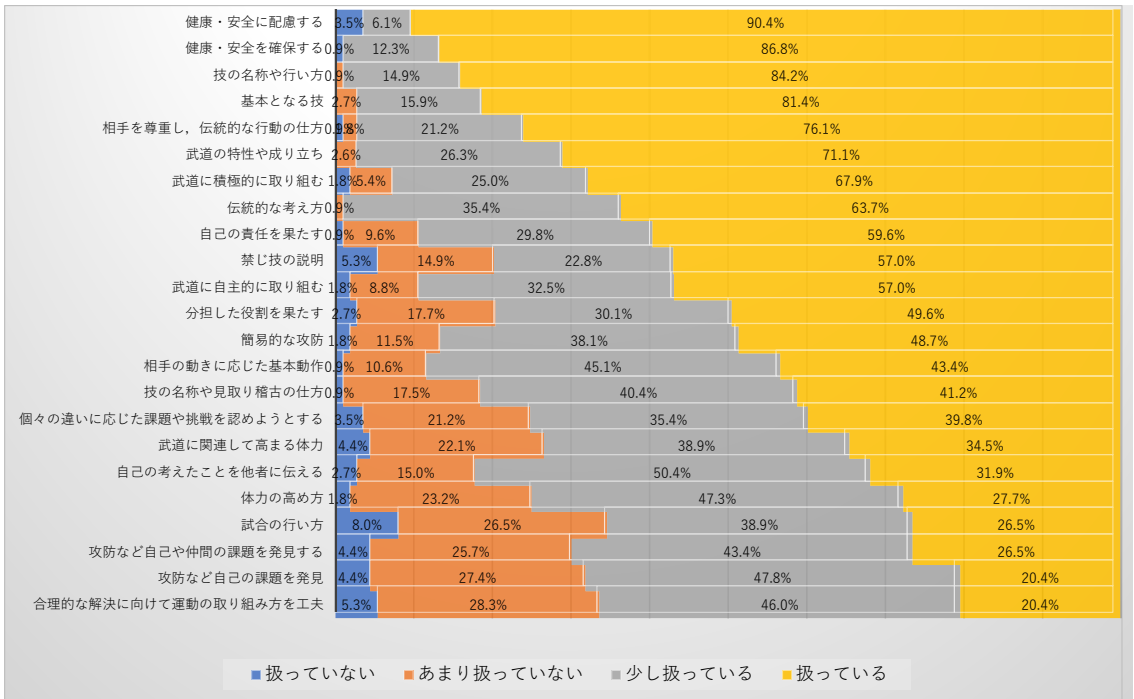

図15 授業で扱う内容

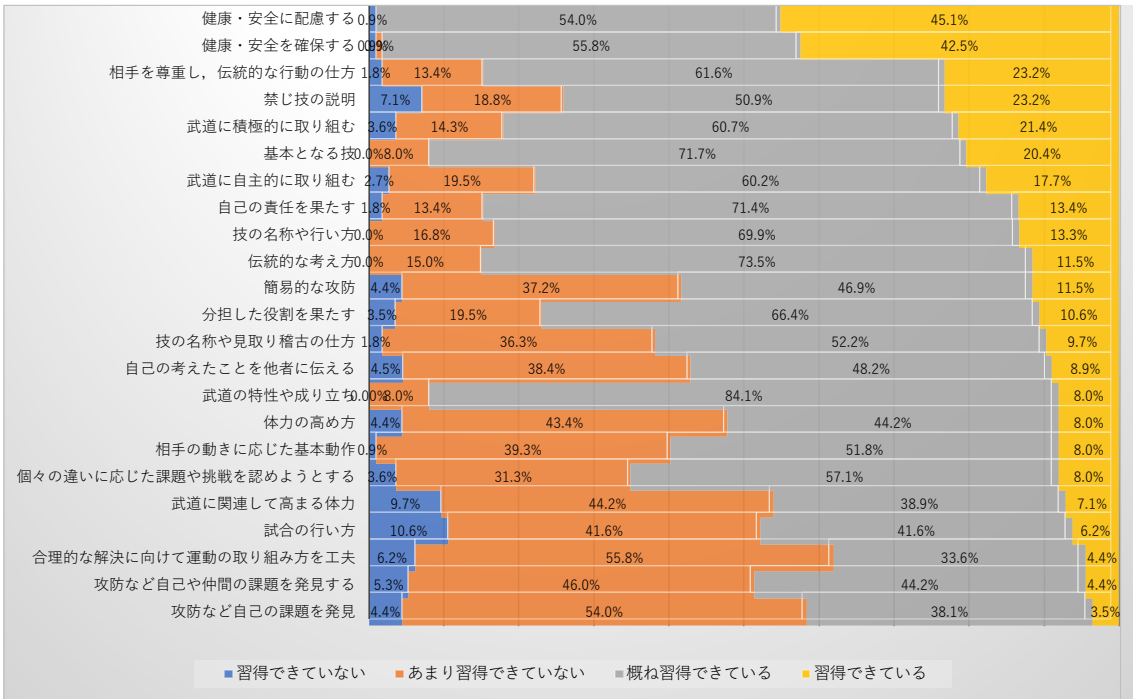

図16 生徒の習得状況

4)「我が国固有の伝統と文化への理解を深める」ための指導内容

「武道の授業を通して『我が国固有の伝統と文化への理解を深める』ことが求められていますが，このことを留意して実施されている指導内容を具体的にお書きください」という問いに対して自由記述で得られた回答にテキスト分析を施した．記述の中で多く使われていた語（頻出語，上位 20 語）を表3に示している．出現回数が最も多かった語は「相手」（62 回）で，次いで「指導」（57 回），「武道」（37 回），「礼」（35 回），「礼法」（31 回），「礼儀」（30 回）と続いている．

表 3　指導上の留意点の頻出語（上位 20 語）

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	相手	62	11	作法	21
2	指導	57	12	説明	19
3	武道	37	13	学習	18
4	礼	35	14	伝統	15
5	礼法	31		日本	15
6	礼儀	30	16	時間	14
7	歴史	29		伝える	14
8	尊重	27		理解	14
9	柔道	26	20	文化	13
10	授業	24		練習	13
11	行う	22			

次に，これらの抽出された語と語の関係性を示す共起ネットワークを作成した（図 17）．出現パターンが似通っていたり，共起の程度が強いものほど太い線で結ばれており，出現回数の多い語ほど大きな円で描かれている．実線で結ばれている語は同じサブグラフに含まれ，今回は 8 個のサブグラフが検出された．それぞれのサブグラフに含まれる頻出語から，武道の授業をとおして我が国の伝統文化への理解を深めるために教員がどのようなことに留意して指導しているのかを表すワードを整理した．

サブグラフ 1 は「態度的側面」，サブグラフ 2 は「基本的技能」，サブグラフ 3 は「武道の起源・歴史」，サブグラフ 4 は「技能的側面」，サブグラフ 5 は「伝統文化」，サブグラフ 6 は「立ち居振る舞い」，サブグラフ 7 は「競技説明」，サブグラフ 8 は「精神的側面」をそれぞれ表していると考えられる．

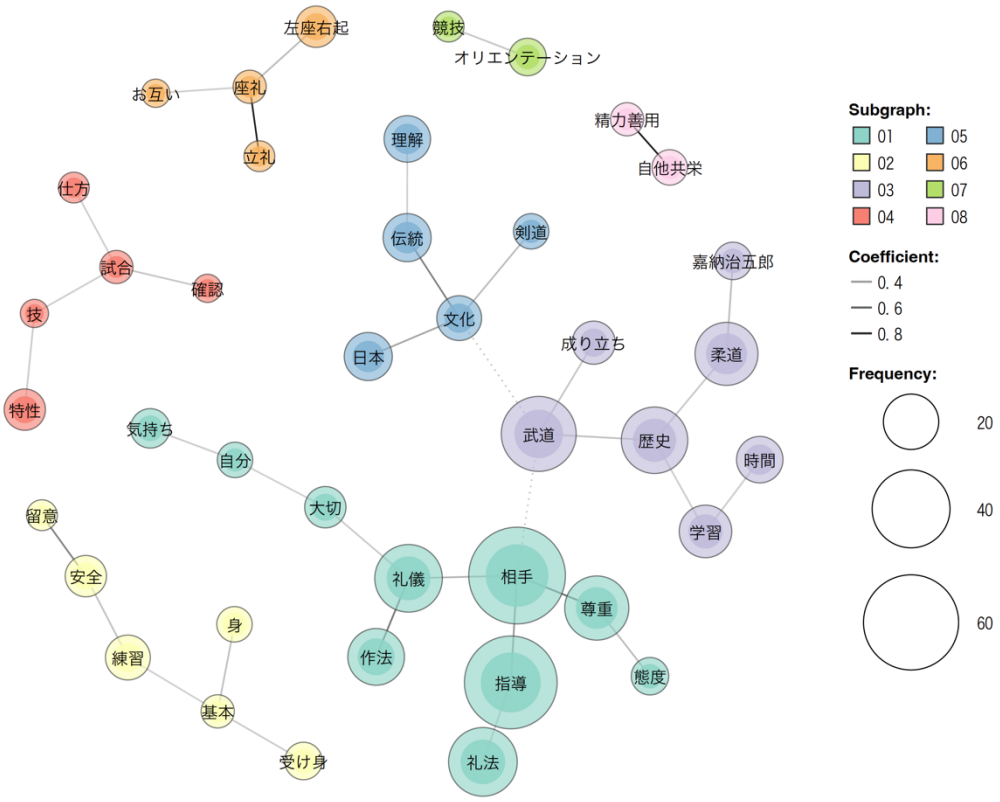

図 17 指導上の留意点（共起ネットワーク）

5）武道の授業を実施するにあたっての課題や要望

「武道の授業を実施するにあたっての課題や要望などを，具体的にお書きください」という問いに対して自由記述で得られた回答にテキスト分析を施した．記述の中で多く使われていた語（頻出語，上位 20 語）を表4に示している．出現回数が最も多かった語は「指導」（33 回）で，次いで，「安全」（31 回）「柔道」（30 回）で，「コロナ」（27 回），「剣道」（26 回），「武道場」（23 回），「畳」（20 回）と続いている．

次に，これらの抽出された語と語の関係性を示す共起ネットワークを作成した（図 18）．10 個のサブグラフが検出され，それぞれのサブグラフに含まれる頻出語から，武道の授業を行うにあたって教員が感じる課題や要望などを表すワードを整理した．

サブグラフ 1 は「用具の確保や指導」について，サブグラフ 2 は，「新型コロナウイルス感染症への対策」，サブグラフ 3 は「武道授業の困難さ」，サブグラフ 4 は「活動時間」，サブグラフ 5 は「生徒の体力・性別」，サブグラフ 6 は「武道場」，サブグラフ 7 は「学習」，サブグラフ 8 は「専門性」，サブグラフ 9 は「外部指導者」，サブグラフ 10 は「種目」をそれぞれ表していると考えられる．

表４　授業実施上の課題・要望の頻出語（上位 20 語）

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	指導	33	10	難しい	18
2	安全	31	12	防具	16
3	柔道	30	13	時間	14
4	コロナ	27		課題	13
5	剣道	26	14	確保	13
6	武道場	23		用具	13
7	畳	20	17	怪我	12
	武道	20		教員	12
9	試合	19	19	学校	11
10	生徒	18		多い	11

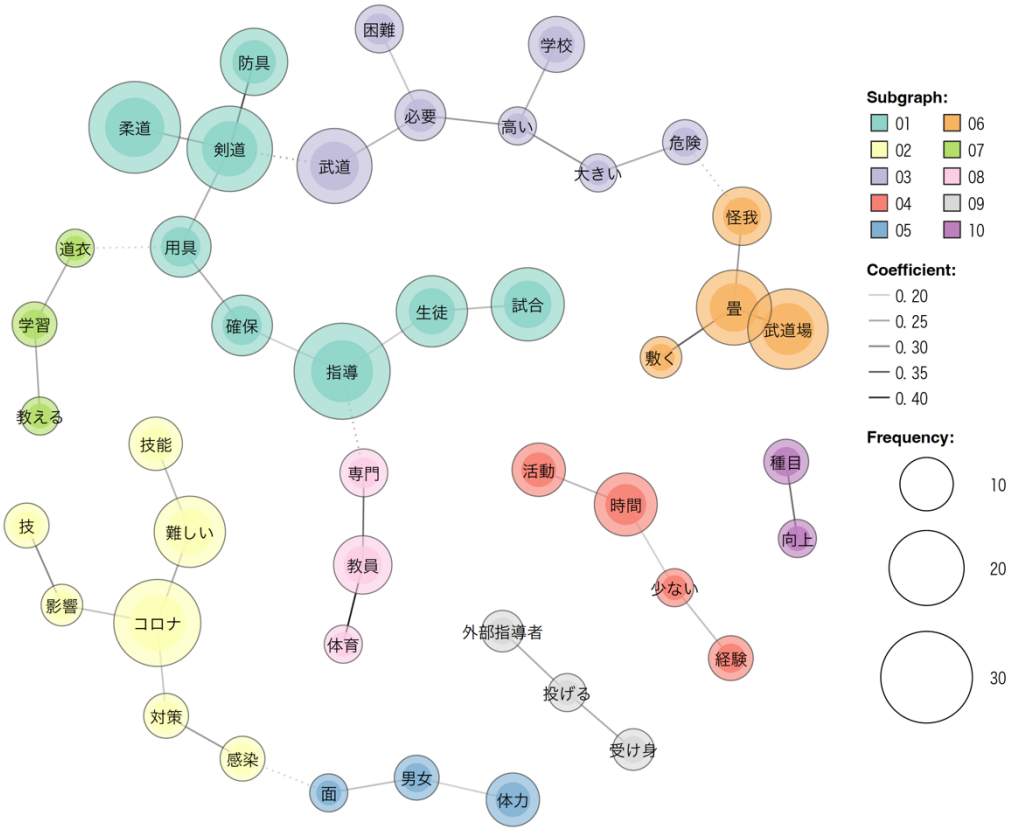

図１８　授業実施上の課題・要望（共起ネットワーク）

3. まとめ

鹿児島県内の中学校における武道授業の実施状況について，アンケート調査の結果をまとめると次のようである．

1） 実施している種目は柔道が最も多く，7 割を超える学校で行われていた．また，複数種目実施している学校も 1 割ほど見られた．

2） 実施時間数は，各学年概ね 8 時間から 9 時間程度である．

3） およそ 7 割の学校が男女共習で行っており，その 85%で男性教員が指導している．また，男性教員と女性教員によるチームティーチングを行っている学校も 1 割弱みられた．

4） 男女別習の場合，女子生徒を女性教員が指導しているのは 4 割に満たず，男子生徒への指導のほぼ全てを男性教員が行っているのと比べて，生徒－教員の性別の不一致が多く生じている．

5） 外部指導者を任用している学校は 13.9%で，その役割としては授業の実施や補助が多い．

6） 授業の実施にあたっては，健康や安全に配慮する中で基本的な技の習得や立ち居振る舞いなどが多く扱われており，生徒も概ね習得している．一方で，試合の行い方や攻防の中で課題を発見することなどは多くは扱われておらず，生徒の習得状況も低い．

7） 「我が国固有の伝統と文化への理解を深める」ため，「態度的側面」「基本的技能」「武道の起源・歴史」「技能的側面」「伝統文化」「立ち居振る舞い」「競技説明」「精神的側面」に留意した指導が行われている．

8） 「武道の授業を実施するにあたっての課題や要望」として，「用具の確保や指導」「新型コロナウイルス感染症への対策」「武道授業の困難さ」「活動時間」「生徒の体力・性別」「武道場」「学習」「専門性」「外部指導者」「種目」といった要因が挙げられた．

9） 回答者のほとんどが武道の授業を担当している中で，段位を保有していない者が 4 割を超えており，体育の授業以外に武道種目の経験がない者の割合も 4 割近くに達している．

課題や要望として挙げられた要因のうち，「用具の確保や指導」が実施種目として柔道が多く選択される背景にあると考えられるが，そのことがまた「武道場」といった実施場所を課題として浮き彫りにしており，対人性という種目の特性により「生徒の体力・性別」への対応の難しさを引き起こしていると推察される．また，「武道指導の困難さ」「専門性」が課題としてあげられる背景には，指導にあたっている回答者の武道経験の乏しさがある．他の運動種目と比較して特に安全への配慮が求められる武道の指導は，その専門性と経験とがより求められる．それにも関わらず，専門家として外部指導者を任用しているのは 1 割ほどに止まっているのが現状である．

本調査では鹿児島県の中学校における現状と課題を明らかにしてきたが，同様な課題を抱えている中学校は少なくないと思われ，安全で効果的な武道授業の展開のためにも早急な対応が求められる．